論　文

現代ギリシア語およびバルカン諸語の関係節構造
－類型統語論の観点から－

井浦伊知郎

0. 序論

0.1.バルカン諸語における関係節内重叙

アルバニア語や現代ギリシア語を含むバルカン諸語の関係節では、関係代名詞が関係節内で目的語として機能する時、それに照応する人称代名詞があらわれる（重叙する）ことがある。例えば Αυτό το βιβλίο το θέλω.「その本が欲しい」の το は重叙代名詞である。

この点をめぐり、関係代名詞の種類（屈折型／非屈折型）によって重叙の傾向に違いが見られること、またその傾向も各言語によって異なることを「プロピレア」8 号の拙論（井浦 1996）で示した。その結果をまとめた表を、ここにもう一度あげる。

	アルバニア語	ルーマニア語	ブルガリア語	マケドニア語	現代ギリシア語
屈折型	i cili (＋＋)	care (＋＋)	който (－)	којшто (＋＋)	ο οποίος (－)
非屈折型	që (＋)	ce (－)	що (－)	што (＋＋)	που (＋)

（＋＋；関係節内で義務的に重叙　＋；任意的に重叙　－；重叙しない）

0.2. 各言語における節内重叙の傾向。本論文の目的

現代ギリシア語では非屈折型 που でのみ重叙が起こり得る。

(1) ο άντρας που του σκότωσε το παιδί.　　「子供が殺した男」

ここでは主格・対格同形の το παιδί「子供」が主語か目的語か（『殺された』のか『誰かを殺した』のか）見分けにくく、「男」が関係節内で目的語なのか主語なのか明確でないため、統語的判別と言う理由でそれに呼応する対格の代名詞 του が出てくる [1]。また次のように、制限節の内部に重叙がなくても、非

制限節では重叙が見られる。

(2) η γυναίκα <u>που</u> είδε Γιάννης ήταν η μητέρα της κοπέλας.

「ヤニスが会った女性はその少女の母だった」

(3) η γυναίκα, <u>που</u> <u>την</u> είδε Γιάννης, ήταν η μητέρα της κοπέλας.

「マリアはヤニスが会った人だが、彼女はその少女の母だった」

これと反対に、例えばアルバニア語では屈折型で重叙が義務的である。

(4) Këto toka <u>të cilët</u> <u>i</u> hapën kooperativistët ....

these earth-indf.sg.nom. whom 3.pl.acc. open-aor.pl.3 cooperativist-df.pl.nom.

「共同農業組合のメンバーたちが（<u>それを</u>）切り開いたこれらの土地は…」

非屈折型の që を用いた例では、重叙代名詞 i は義務的なものではない。

(5) Këto toka <u>që</u> (<u>i</u>) hapën kooperativistët ....

these earth-indf.sg.nom. which 3.pl.acc. open-aor.pl.3 cooperativist-df.pl.nom.

アルバニア語、またルーマニア語の場合、むしろ屈折型使用の際に重叙が求められているが、両言語においては元来目的語重叙の頻度が高いので、特に resumptive pronoun である関係詞の重叙代名詞についてはそれが常用化し、力点を置かれない存在になっているのでないかと考えられる。例えばルーマニア語では非屈折型 ce の選択基準が著しく制限されており、care と ce の使い分け、つまり「重叙し得る屈折型」と「重叙しない非屈折型」への二極化が起こっていると思われる[2)]。

ところで、ギリシア語や他のバルカン諸言語における節内重叙という現象は、世界の言語の中でどのような位置付けを持つのか、またどの程度の普遍性を持つものなのだろうか。本論文では、類型統語論の先行研究によってそれを検討する。

1. 本論

Givón (1990: 651-690) には、様々な言語の関係節構造をいくつかの「戦略 (strategy)」によって分類している記述が見られる。その中から、バルカン諸語に関係があると思われるもの[3)]を次にあげていこう。

1.1. 非埋め込み戦略 (non-embedding strategy)

ある名詞句にそれを修飾するような文や節を付け加える際、最も単純な方法は、その文や節をそのまま名詞句の前方または後方（多くは後方）に置くことである。次の(7)では that man を you met him yesterday が後方から修飾している。(6)のように関係代名詞などを用いて主文の中に修飾節を syntactic に埋め込むのでなく、paratactic に文中に置いたに過ぎない。

(6) The man you met yesterday is a crook.「君が昨日会った男はいかさま師だ」

(7) ...well, that man is a crook, y'know, like, you met him yesterday, right?

「…あのね、あの男はいかさま師だよ、君が昨日(その彼に)会ったのは、ね、だろう？」

1.2. 前方照応型代名詞戦略（anaphoric pronoun strategy）

ある名詞（句）を修飾する節が、関係詞に導かれて後方に埋め込まれる場合、その名詞句に一致する代名詞が関係節内にあらわれる例がある。このように先行詞に文法的に一致する要素は coreferent argument と言われるが、ここではヘブライ語の例をあべる。

(8) ha-isha she-Yoav ohev ot-a...
the-woman REL-Yoav loves ACC-her
「ヨアヴが（彼女を）愛した女性…」（関係節内で直接目的語）

(9) ha-isha she-Yoav natan l-a et-ha-sefer...
the-woman REL-Yoav gave to-her ACC-the-book
「ヨアヴが（彼女に）本をあげた女性…」（関係節内で間接目的語）

(8)では直接目的語の位置に、(9)では間接目的語の位置に名詞 isha「女性」に照応する-a がある。ヘブライ語ではこのように、前方照応型代名詞が関係節内の必須成分である [4]。バルカン諸語の関係節にもこれと同じような現象が見られることは序論で述べた通りである。

特にギリシア語の場合、やや特殊だが、非屈折型 που の関係節で、間接目的語でありながらこうした重叙代名詞が現れる例もある。(Mackridge 1985, 249)。

(10) Ο άνθρωπος που του δάνεισε τα λεφτά είναι θειός μου . (= στον οποίο δάνεισε)「(彼に) 金を貸した人は私の叔父だ」

この場合、属格代名詞が関係節中で重叙代名詞として用いられている。

1.3. 関係代名詞戦略（relative pronoun strategy）

ここで示すものは前節で述べたものとよく似ているが、節内に前方照応型代名詞があらわれない。その一方で、関係詞の格役割が形態面でより明確に示されるという傾向がある。この特徴が最もよくあらわれている例として、Givón はドイツ語の文をあげている。

(11) der Mann, den ich schon lange kenne…
the man that-m.acc. I already long know
「私がずっと前から知っている男は…」

(12) der Mann, dem ich das Buch gegeben habe…
the man that-m.dat. I the book given have
「私がその本をあげた男は…」

このように先行詞の性・数と節内での格役割に応じて関係代名詞が格表示を伴って変化する例は、現代ギリシア語の ο οποίος と同様である。

(13) Η συζήτηση την οποία κάναμε πρέπει να μένει μεταξύ μας.
「我々が行ったやりとりは我々の間でよく心にとめておくべきだ」

(14) Αυτός είναι ο άνθρωπος του οποίου (στον οποίο) έχω μιλήσει επανειλημένως.
「こいつは、私が何度も話しかけた男だ」

1.4. ギャップ戦略（gap strategy）

比較的厳密な語順を持つ言語では、関係節にあたる部分が関係詞、またはそれに類するものをまったく伴わないことがある。この場合、問題となる節は単文においてあるべき位置からそのまま修飾される語句の直前（または直後）に移動しており、読み手（聞き手）はその移動したあとの空隙（gap）の存在によって、主節と修飾句の関係を理解する。典型的なものとして、Givón は「厳格な SOV 言語」である日本語の例をあげている（原文はローマ字転写）。

（単文）男が 女に 手紙を 書いた

(15) 女に手紙を書いた 男は…（coreferent argument は関係節内で主語）

(16) 男が女に書いた 手紙は…（coreferent argument は関係節内で直接目的語）

(17) 男が手紙を書いた 女は…（coreferent argument は関係節内で間接目的語）

Givón はペルーの Bora の例に言及している。この言語には関係詞に類する形態素がまったく見られないが、修飾節内の動詞に、先行詞として前方移動し

た名詞句に照応する代名詞が coreferent argument として付加される。

(18) walle　　oohîîbye-ke　picyôô　mêêtsá-wá　hallú-vu
woman/SUBJ　dog-OBJ　put-PERF table-CL/POSS　top-to
「女は犬をテーブルの上に置いた」

(19) oohîîbye　walle　　mêêtsá-wá　hallú-vu　picyôô-be　úmivá
dog　woman/SUBJ　table-CL/POSS　top-to　put-it/CL　flee/PERF
「女がテーブルの上に（それを）置いた犬は逃げ出した」

語順と格表示マーカーによって oohîîbye が先行詞、それに続く walle ..... picyôô-be が修飾節となる。語順の違いを別にすれば、-be は動詞と密接に結びつくことで、ギリシア語などバルカン諸語の関係節内における重叙代名詞と似たような機能を持っているのではないかと思われる。

1.5. 名詞化戦略（nominalization strategy）

Givón は主にトルコ語の例をあげているが、ここではラサ・チベット語の例をあげる。修飾節内で主語の役割を果たす名詞句は属格の格表示を持ち、名詞化した動詞と共に名詞句を修飾するが、修飾節の動詞には coreferent argument の格表示マーカーが付随する。

(20) kho　sdod-sa-'i　　kha-pa...
he/ABS live-LOC/NOM-GEN　house
「彼が住む家」（lit.「彼が（そこに）住むの家」）

(21) kho-s　stag　gsdod-yag-gi　　me-mda...
he-ERG tiger kill-INSTR/NOM-GEN　gun
「彼が虎を殺した銃」（lit.「彼が（それで）虎を殺すの銃」）

(22) kho-s　bsad-pa-'i　　stag...
he-ERG kill-O/NOM-GEN tiger
「彼が殺した虎」（lit.『彼が（それを）殺すの虎』）

このように格表示マーカーが動詞に付随する関係節化について Givón は、動詞コード（後述）の傾向のやや弱いものであるという見方ができると述べている。

1.6. ブラケット戦略（bracketing strategy）

パプワ諸語に属する Hewa は SOV 言語であるが、先行詞に照応する coreferent argument としての名詞句が関係節に残ったままであることが多く、その結果、主節と関係節で同じ名詞句がそのまま繰り返される。

(23) an-a möfi-lë wipe m-ié-m-e möfi-le
1.sg.-SUBJ man-1.sg./SUBJ pig IND-shoot-REMOTE-REAL man-OBJ
m-ei-y-e
IND-see- REC-REAL
「私は豚を撃った男を見た」
(lit.『私は、男が豚を撃った（のだが、その）男を見た』)

(24) yau-lopa amau ma-lë nap-ëe mo-nó-m-e
dog-3.pl./SUBJ food mother-3.sg./SUBJ we-dat. REAL-give-REM-REAL
amau m-a-y-e
food IND-eat-REC-REAL
「犬は母が我々にくれた食物を食べてしまった」
(lit.『犬は、食物を母が我々にくれた（のだが、その）食物を食べてしまった』)

これらの例は一見すると、非埋め込み戦略によく似ている。しかし非埋め込み戦略の場合、関係節内の名詞に対して主節であらわれる coreferent argument は名詞に照応する代名詞（または指示詞）であり、一方 Hewa の例では名詞が主節においてそのまま繰り返される傾向が強い。möfi「男」、amau「食物」がそれにあたる。しかも非埋め込み戦略では修飾節がすべて主節に後置（場合によっては前置）されるのに対し、この Hewa の例では関係節が主節に前置され、主題（theme）化しているという特徴も見られる。結果として主文の中に挟み込まれ、あたかも括弧でくくり込まれた（bracket された）ように見える。

1.7. 動詞コード戦略（verb-coding strategy）

ラサ・チベット語の名詞化戦略の例で見たように、関係節内の動詞が coreferent argument に相当する格表示マーカーを伴う場合がある。これは関係節内から coreferent argument が取り除かれる代わりに、関係節内の動詞にその役割が付加される（coding を受ける）ことであると言える。

こうした例としてあげられているのがフィリピンの Bikol における関係節化である。この言語では、常にそれぞれの語頭に付されて意味役割を表示するマ

ーカーが、関係節化の際にも重要な役割を果たしている。目的語に限って言えば、この格表示マーカーと同じような役割をバルカン諸語の重叙代名詞が担っていると言える。

(25) na-ta'o kang-lalake 'ang-libro sa-babaye
PAT-give AGT-man TOP-book DAT-woman
「本は男が女に与えた」(Patient-topic)

(26) marai 'ang-libro na na-ta'o kang-lalake sa-babaye
good TOP-book REL PAT-give AGT-man DAT-woman
「男が女に(それを)与えた(ところの)本はいい本だ」
(lit.『(彼女に)男が本を与えたところの女は…』)(関係節内で被動作主)

libro「本」の被動作主マーカーである na-が関係節化した節内の動詞に残っている。この格表示は、ギリシア語の ποu 関係節内の重叙代名詞とよく似た役割を持つと言える。

1.8. 混合型関係節化戦略(mixed relativization strategy)

他の言語の関係節化もここに述べたいくつかの戦略の組み合わせとして説明できるのではないかと思われる。Givón が例にあげているミクロネシアの Ponapean には、関係詞と指示詞によってくくられたブラケット型関係節の特徴が見られる一方、関係節内の動詞には格表示マーカーによるコード化の傾向も見られる。しかし Givón によればこのコード化は与格にのみ必須であり、Ponapean の関係節化は部分的な動詞コード化とブラケット化の組み合わせである。次の例の場合、(30)には与格の格表示マーカーがあらわれている。

(27) lii kilang ool[5)]
woman see man 「女は男を見た」

(28) lii me kilang ool-ð
woman REL see man-DEM 「男を見た女」

(29) ool me lii kilang- ð
man REL woman see-DEM 「女が見た男」

(30) lii ki-õng serapein-o puung
woman give-DAT girl-DEF book 「女はその少女に本を与えた」

(31) serapein-o me lii-o ki-õng puuk-o…
girl-DEF REL woman-DEF give-DAT book-DEM

「女が本を与えた少女」

このように、(30)では serapein「少女」に対応する与格マーカー-õng が関係節内の動詞 ki-に付随している。関係詞 me が不変化であることを考えると、この格表示もギリシア語の που 関係節における節内重叙と似た機能を持つように見える。

また言語（ラサ・チベット語の例(20)も）によっては locative や instrumental の場合にも同様のマーカーが見られるという。ギリシア語で που を用いた場合、そういうことまでは行われない。

(32) το κουτί που έβαλε το δώρο

「彼／彼女が贈り物を入れた箱」

(33) το μαχαίρι που εκόψε το τυρί

「チーズを切ったナイフ」

2. 考察。言語類型から見たバルカン諸語の関係節内重叙

前説で見たように、現実の言語では関係節化のための多種多様な「戦略」がとられ（また組み合わされ）ており、このことは、バルカン諸語における関係代名詞節の特徴が必ずしも特殊なものではないことを示唆している。

上記 8 つの戦略のうち、明らかにバルカン諸語の関係節と関係ないのは、非埋め込み戦略と名詞化戦略である。ギャップ戦略も直接の類似性はないが、Bora に見られるような coreferent argument と節内動詞の密接な結びつきは、序論で問題にした補文節内重叙の例に似ている。

また、動詞コード戦略の例としてあげた Bikol の格表示マーカーは前方照応型代名詞、例えばバルカン諸語（ブルガリア語を除く）における代名詞重叙の、さらに基本的な状態であると考えることもできるのではないだろうか。違うのは、バルカン諸語ではこうした動詞コード（つまり動詞と弱形人称代名詞の結びつき）が目的語格に限られることと、その動詞コードが文の談話的背景によっては生じたり生じなかったりするという点である。動詞コードという現象の存在は、「重叙」という現象が従来抱かれがちな本来必要でないもの、冗長なものではなく、基本的に必要な文内要素として振舞うものであるという本論の見解を支持すると考えられる。

残念ながら Givón の示す例では、個別言語における文脈・言語外情報がどのように関与しているかについてそれほど詳しく記述されていない。しかしこれ

らの例を踏まえて言語類型の中で現代ギリシア語やバルカン諸語の目的語重叙を見た時、それは局地的な現象でなく、やはり普遍的な言語現象の一つと考えるのが妥当ではないだろうか。

注

1) 「男」が主語なら次のようになる

ο άντρας <u>που</u> σκότωσε το παιδί.　　「<u>子供を</u>殺した男」

2) ちなみにブルガリア語では関係代名詞の重叙そのものが全くと言ってよい程見られず、マケドニア語では関係節の種類にかかわらずほぼ重叙が生じている。重叙の有無は正反対であるが、屈折型と非屈折型で重叙の傾向に事実上差がないという点では共通している。詳細は井浦（1996）を参照のこと。

3) 以下、特に示さない限り文例は Givón による。本文下の語釈は若干書き改めている。日本語訳および下線は筆者。

4) ヘブライ語には「擬似格戦略（equi-case strategy）」と呼ばれる現象もある。

l-<u>a-ish</u>　<u>she</u>-Yoav　natan　(l-<u>o</u>)　et-ha-sefer　eyn　kesef

to-the-man REL-Yoav　gave　to-him ACC-the-book not　money

「ヨアヴが（<u>彼</u>に）本をあげた<u>男</u>にはお金がない」

ha-ish は、主節でも関係節内でも間接目的語で同一の格表示（与格）になる。この時、関係節内の間接目的語句 l-o は必須の成分でなくなる。つまり、主節の間接目的語句 l-a-ish が、関係節内の間接目的語句としての格表示役割をも擬似的に（equi）果たすのである。同じ前方照応型代名詞を伴う言語でも、バルカン諸語とは大きく異なるところである。

5) Ponapean は SVO 言語であり、単文における主語と直接目的語は格表示を伴わないという。

参考文献

Buchholz, Oda / Fiedler, Wilfried (1987). *Albanische Grammatik.* Leipzig: Verlag Enzyklopädie.

Givón, Talmy (1984). *Syntax. A functional-typological introduction, Vol.1.* Amsterdam/ Philadelphia: J.Benjamins.

Givón, Talmy (1990). *Syntax. A functional-typological introduction, Vol.2.*

Amsterdam/ Philadelphia: J.Benjamins.

Holton, David/ Mackridge, Peter/ Philippaki-Warburton, Irene (1997). *Greek. A Comprehensive grammar of the modern language.* London/ NY: Routledge.

Hopper, Paul J./ Traugott, Elizabeth Closs (1993). Grammaticalization. Cambridge: Cambridge Univ.Press.

Mackridge, Peter (1985). *The Modern Greek Language.* Oxford: Oxford Univ.Press.

Plank, Frans (ed.) (1984). *Objects. Towards a Theory of Grammatical Relations.* NY/ San Francisco/ London: Academic Press.

井浦伊知郎（1996）「バルカン諸言語の関係節における重叙代名詞の役割」『プロピレア』8, 31-45.

Eine typologische Betrachtung über die Objektsverdoppelungen innerhalb der Relativsätze in Balkansprachen

IURA Ichiro

Dieser Aufsatz behandelt die Objektsverdoppelungen innerhalb der Relativsätze in Balkansprachen, mit Hilfe der typologisch-syntaktischen Analysen von Talmy Givón, in den diesolche Phänomina in verschiedenen Sprachen der Welt klassifiziert sind.

Im Neugriechischen und in allen anderen Balkansprachen ist die Verdoppelung des durch die Kurzform des Personalpronomens (Objektzeichen) ausgedrückten Objekts (direkt oder indirekt) weit bekannt. Diese Verdoppelungen kann man nicht nur in einfachen Satz, sondern auch in Relativsätzen finden, wenn das Relativpronomen sich als Objekt innerhalb des Relativsatzes verhält. Das indeklinierbare Relativpronomen που ist als direktes (oder manchmal indirektes) Objekt innerhalb des Relativsatzes (unobligatorisch, aber vielmehr) mit dem Personalpronomen verdoppelt. Die Existenz des verdoppelten Personalpronomens ist als morphosyntaktische Markierung verstanden. Andererseits ist das deklinierbare Relativpronomen ο οποίος, im Gegensatz zu που, unbedingt nicht verdoppelt. Solche Phänomina, d.h. syntaktische Markierung zu Objekt mit dem Objektzeichen, kann man auch in anderen Sprachen der Welt finden. Dazu gehört auch *verb-coding*, Kodierung zu Verb mit dem Merkzeichen, das mit dem Relativpronomen grammatisch übereinstimmt.

Die verschiedenen Beispiele der Markierung zu Objekt mit Pronomen oder irgendeinem anaphorischen Merkzeichen zeigt, daß die Verdoppelung im Relativsatz in Balkansprachen zu den unversalen Sprachphänomina gehört.